空海の密教布教戦略としての書芸

児玉　正幸*

Kukai's use of calligraphy as strategy in missionary work for the Mikkyo sect of Buddhism

Masayuki KODAMA*

Abstract

Not only were Kukai and Saicho very famous Reformers, but they were also celebrated calligraphers of the Heian Period. Kukai's calligraphy contrasts strongly with Saicho's. A comparison of the calligraphy of the two men reveals much about their character.

Kukai had good handwriting in the six kinds of forms of kanji, and, what is even better, he could change the form of kanji, depending on his addressees. Kukai, who was extremely versatile like Leonardo da Vinci, knew how to get along in life. But Saicho, who dedicated himself to the Tendai sect of Buddhism through his life, was too earnest to succeed in life.

In this paper I intend to clarify Kukai's use of calligraphy as strategy in missionary work for the Mikkyo sect of Buddhism.

KEY WORDS: *Kukai, Mikkyo, calligraphy, Saicho, Saga*

はじめに

学者肌の最澄（766～822）の飾り気の無い書風に対して，天才肌の空海（774～835）の書風は好対照をなしている。空海の書技はゆくとして可ならざるはなしで，空海は各種の書体（篆・隷・草・行・楷・飛白）を自在にこなした。就中，「狂逸」の「草聖（草書の聖人）」[1] と称えられただけでなく，相手によって柔軟に書体を変えている。

例えば，思想界の桁外れの巨人にして能書家，空海の相手が，最澄であれば，最澄好みの王羲之流の書体（奈良王朝貴族通有の書体）で書状を書き送っている（最澄宛空海の王羲之流書状〔推定弘仁３～４年〕は，東寺所蔵の「風信帖」に三通現存)。相手が嵯峨天皇であれば，遊び心のはじけた飛白体（元来，梵字の書法を導入した書体で，いわば曲芸書体）を披露する[2] 一方で，個人的には，東西文明が交流する国際都市長安で流行中の顔真卿（709～85）[3] の新書体を愛好している節が見られる。現に，空海が胎蔵界の結縁灌頂を授けた人名簿に限定して言えば，空海の真跡に間違い無し，とのお墨付きがつけられた「灌頂歴名」（高雄山神護寺蔵，弘仁３～４年に高雄山寺〔神護寺の前身〕で空海が金剛界と胎蔵界の両灌頂を授けた人名簿）には，空海が留学先の長安で吸収した顔真卿の新書体を想起させる書体が認められる[4]。実は，「灌頂歴名」は空海個人の覚え書きなので，随所に加筆修正の跡が認められる遺墨である。他人に見せる目的の全く無い人名簿を，空海が顔真卿の新書体（顔法）に近似した筆さばき

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

で書いている点に，私は図らずも空海の書技の自然体を，即ち空海好みの書体を感じとるのである。

空海の融通無碍，自由闊達で装飾的な筆致には，空海の多芸多能ぶりや天性の芸術家肌が認められるだけではない。そこには，渡世の下手な最澄を尻目に，すいすいと政界を遊泳して行く空海の巧みな処世術さえ感じられる。空海の真言密教布教戦略にとって，彼の書技はいかなる位置づけを占めるものであったのか。それを明らかにすることが，本稿の目的である。

そこでまず初めに，空海に至るまでの書道略史を辿り（一），次に，嵯峨王朝下の新唐風化政策に便乗した，空海の真言密教布教戦略としての書道芸術を探る（二）。

一，空海に至るまでの書道略史

橘逸勢や嵯峨天皇とともに，空海は日本書道史上初めて，三筆と称えられた能書家である[5]。

では，平安時代の三筆に先行する中国の書法が，いつ日本に渡来し，誰の作品に濃厚な影響を残していたのであろうか。

7世紀の飛鳥時代に聖徳太子著『三経（法華経・勝鬘経・維摩経）義疏』が成立した。本書が中国の書法の影響下に墨書された経典の注釈書である点は，間違いない。けれども，その下敷きにされた能書家が誰であったのか，それは未だ特定されていない。

ところが，飛鳥時代に続く白鳳時代になると，中国の特定の能書家の書風を想起させる遺墨が出現するようになる。例えば，白鳳時代に写経生の宝林（朝鮮帰化僧）によって写経された『金剛場陀羅尼経』の肉筆は，初唐の能書家，欧陽詢（557～641）の峻厳の気に満ちた書法（欧書）の影響がみられることが指摘されている[6]。

8世紀の奈良時代になると，平城京朝廷貴族の間では，貴族趣味にかなった王羲之（307?～65?）・王献之（344～88）父子の書風（王書）がもてはやされた。王羲之ブームの火つけ役は唐王朝の太宗（598～649）であった。太宗の書風の好みが，そっくりそのまま平城京の王朝貴族に引き継がれたのである。その二王以外には，初唐の三大家の一人，欧陽詢の書風も愛好されていたようである。実際，東大寺献物帳には，王羲之・王献之父子や欧陽詢の書が見える。

9世紀の平安時代には，三筆がもてはやされる。つまり橘逸勢，嵯峨天皇，空海である。

ただし，逸勢に関しては，残念ながら現状では，彼の真跡と認定される遺墨は発見されていない。しかしながら，「尤妙　隷書」（『日本文徳天皇実録』嘉祥3年〔850〕5月15日の条）と称えられた逸勢の筆と伝承される作品は，数点現存している。例えば，「伊都内親王願文」[7]や興福寺所蔵の「南圓堂銅燈臺銘」[8]，仁和寺所蔵の「三十帖策子」第二十九帖。「三十帖策子」第二十九帖は，空海が恵果から手写を許された真言の儀軌（実践法）に関する虎の巻で，友人の逸勢も写経を手助けした，という伝承が現存している[9]。その他に，弘仁9年（818）逸勢染筆，と伝承される王城の「北面三門」[10]。いずれも伝逸勢筆であっても，決めてとなる逸勢の真跡が未発見なので，彼の手になるものだとの断定は現状ではできていない。

三筆が書技を競い合う時代に，天台宗の開祖，最澄がその高潔な人格を映した墨書を数多く残した。例えば，現存の最澄の真跡として認定される書物に，「入唐牒（即ち中国旅券）」（延暦寺蔵），「最澄将来越州録（最澄が越州で抄写した経疏の目録）」（延暦寺蔵），「空海請来目録（空海が請来した経論疏章の目録原本を最澄が臨写）」（教王護国寺＝東寺蔵），「久隔帖（最澄が弟子の泰範に宛てた書状）」（奈良国立博物館蔵），「羯摩金剛目録（最澄が将来した密教法具や文書経典の目録）」（延暦寺蔵），「天台法華宗年分縁起」（延暦寺蔵），等がある。

書聖王羲之の書体を模倣した最澄の遺墨には，彼の天台教学の求法者としてのひたむきで，誠実な人柄が反映されている。飾り気のない自然体のその遺墨には，万能の人空海のような，書道芸術家としての天才肌の書技を感じることができない[11]。空海と並び立つ宗教界の大巨人，最澄の書風と対比することにより，本稿の考察対象である空海の書芸の特色は際立つ。

二，空海の密教布教戦略としての書芸

(1) 空海と最澄の蜜月時代

仏教が国教として庇護される時代を共有した最澄と空海にとって，時の最高権力者，天皇の外護が宗勢拡大の最短距離であった。最澄は幸運にも平安京遷都を推進する桓武天皇の新宗教政策に叶い，寵愛された。他方，空海にとって幸運だったのは，唐風文雅に傾倒する（「山水に詣でて逍遥し，無事無為にして琴書を翫ぶ」）嵯峨天皇（786～842）の即位（大同4年〔809〕4月）とその長期王朝支配の時代（嵯峨－淳和－仁明の三代）に邂逅して，その活動的生涯を閉じたことであった。

空海は20年間の留学予定を2年間に短縮して大同元年（806）に帰国の途中，自分を外護し，引き立ててくれた桓武天皇（737～806）の崩御の知らせに接した。空海帰国時には，平城朝が成立していた。新王朝は2年で帰国した空海の処遇を決めかねたのか，空海は太宰府の都府楼や筑紫の観世音寺に足止めを食らったけれども，持ち前の処世術を用いて，大同4年の7月には，即位間もない嵯峨天皇から入京の勅を取り付けた。

しかし，そこに到るまでには，空海の雌伏，隠忍自重の時期は長かった。と言うのも，桓武朝の跡目を継いだ平城朝下，空海の学業と渡唐の大恩人，阿刀大足が侍講を勤めた伊予親王が，藤原宗成の教唆に乗って謀反を企てた廉で失脚したのに伴い，叔父の大足も後ろ盾を失って失脚してしまったからである（大同2年）。けれども，空海には叔父以外にも，朝廷工作のできる莫逆の友として，橘逸勢や南都六宗の高僧たち（勤操等）がいた。空海は奈良旧仏教勢力に対して平安新仏教の立教開宗宣言をしながらも，既成仏教勢力（南都六宗）と全面的に敵対しないところに，真実一路の宗教人最澄とはひと味違う，空海の政治家的資質が感じられる。当時，逸勢の従兄妹の橘嘉智子[12]は神野親王（のちの嵯峨天皇）の正妻であり，南都六宗は朝廷の尊崇を集める一大宗教権力であった。恐らく彼らの水面下の奔走の甲斐あって，空海はその後，九州太宰府から一気に畿内和泉国の槙尾山寺（空海年少の頃，勤操より沙弥戒を授けられたゆかりの場所〔『御遺合』〕）に止住することが叶い，そこで粘り強く虎視眈眈と真言密教布教の機会を待ったに違いない。

空海に入京の許可が下りて高雄山寺（今日の神護寺）入りしたのは，嵯峨天皇即位の年，大同4年（809）の7月であった（『弘法大師行化記』）。空海を和泉国の槙尾山寺から京の都に近い高雄山寺へ手引きした人物は，のちに決定的に袂を分かつことになった最澄と推定される。

それと言うのも，理由の第一として，高雄山寺は最澄をサポートする大学頭和気広世・真綱兄弟（和気清麻呂の子）の氏寺であった上に，未だ無名の空海が，今をときめく天台教学の泰斗，最澄に辞を低くして，刺を通じている（大同4年2月3日）からである[13]。

理由の第二として，片や最澄は早速，同年（809）8月24日に，弟子の経珍を派遣して，7月に高雄山寺入りしたばかりの空海に対して，経典12部の借覧を申し入れているからである（『伝教大師消息』）。最澄は立場上，平城朝に献納された『空海請来目録』を通覧することができた。最澄はその請来目録の圧倒的な質量の豊富さを知るに及んで，渡唐時代にはすれ違いに終わっていた空海の碩学ぶりに畏服したものと思われる。「最も清澄な人」というその名の如く，求法に至純な高僧，最澄の人格を考えれば，空海が未だ無名の一介の僧であろうが，一旦自分が卓越した学識を認定した相手に対しては腰を二重に折って，丁重至極な密典借覧依頼を最澄が出したというのも，さもありなん，と首肯できる。法名最澄とは，実に言い得て妙である。最澄の場合，確実に名は体を表している。

嚇嚇たる名声に包まれた最澄が無名の空海に対して頭を垂れて密教の教えを乞う，その謙虚な姿勢には，求法者としての最澄の真摯さと高潔な人柄が偲ばれる。けれども，密教を密典を通してのみ理論的に修学しようとする最澄の理知偏重の筆授の態度が，実践的修行と師資相承の面授口訣を重視する空海には苛立ちの種であった[14]。密典を貸し出すたびに，空海の鬱憤は増幅したものと推

定される。それでも空海は弘仁３年（812）11月15日，当時わが身が警咳に接するのも困難な，雲上に聳え立つ仏教界の巨峰，最澄に対して，金剛界の結縁灌頂を授け，同年12月14日には，胎蔵界の結縁灌頂を授けた。募る苛立ちと引き換えに，これで空海は一夜にして，平安仏教界のスターダムにのし上がった。

(2) 空海と最澄の交友断絶

しかしながら，その後（同年12月15日），入門儀式程度の灌頂に飽き足らない最澄が，更に密教の奥義の伝法灌頂（阿闍梨灌頂）を求めると，空海は流石にその性急さを戒め，３年間の実修と師資相承の面授口訣を強調した。空海は伝法灌頂の伝授を拒絶した代わりに，多忙な最澄に代わって高弟の圓澄や泰範，光定を密教修行のために高雄山寺で預かる意向には同意し，受諾した。かくして最澄門下三高弟の早々の高雄山寺入りが実現した。

ところが，翌る弘仁４年（813）の11月23日，最澄が『理趣釈経』（『理趣経』の注釈書）を含む密典の借覧を弟子の貞聰に託して，申し入れてくると，ついに空海の怒りが爆発した。空海は「叡山の澄法師の理趣釈経を求むるを答する書」（『遍照発揮性霊集』巻10）を書き送って，最澄の借覧要請をきっぱりと拒絶したのである。それまでに既に，伏線はあった。同年春には，事態を悪化させる事件が発生していたのである。つまり，選りに選って最澄の主命で弘仁４年正月より空海のもとに密教の研鑽に出向していた愛弟子の泰範が，天台宗から真言密教に宗旨替えを起こしていたのである（弘仁４年６月19日付泰範宛最澄の書状に「被ㄴ棄ㄱ老同法最澄」とある）。ミイラ取りが既にミイラになってしまっていたのである。相次いで生起した弘仁４年の諸々の事件は，平安仏教界の両巨峰の間に，緊張感を極度に高めることになった。最澄の再三に亘る叡山復帰要請に対して，泰範は要領を得ない返事を返すだけであった。弘仁７年（816）５月１日，最澄が泰範宛に最後の書状を書き送ると，時を置かずに，泰範には叡山復帰の意思のない旨，空海自身が返書（『遍照発揮性霊集』巻10，『高野雑筆集』巻下）を代筆するに及んで，奈良旧仏教界に共に刷新の新風を吹き込んだ二大仏教改革者の交友関係は，決定的な破局を迎えた。衣鉢を継ぐ後継者として愛弟子の泰範にかけた期待が大きかった分だけ，その裏切りに最澄の受けたショックは大きく，泰範宛の最澄の書状には，深い哀愁の調べが漂っている。差出人が純粋無比の求法者，最澄でなければ，弟子の情に哀訴する（「老僧を棄つる莫かれ」式の）書状の存在は，宗教的指導者の鼎の軽重を問われかねない。泰範宛最澄の書状は，それほどまでに見苦しい繰り言に見えてしまう内容を含む。

最澄に金剛・胎蔵両界の結縁灌頂を伝授することで，空海の知名度は急上昇したにせよ，空海はまだ真言密教の立宗には成功していない。布教活動に関しては，国家の公認する天台宗の宗祖，最澄の後塵を拝する空海をして，平安仏教界の大御所に対して対等以上の高圧的態度をとらせた背景には，インド伝来の正純密教[15]（金剛智→不空と付法された金剛頂系密教と，善無畏から付法された大日経系密教）を伝持する唐都長安青竜寺の恵果阿闍梨から，秘儀を受法したのは，三国（天竺・唐土・本朝）の中でも空海ただ一人，我こそ純密の正師なり，という自負があった。それだけではない。嵯峨朝の後援をとりつけたという，空海の並々ならぬ自信が伏在していたものと思われる。実際に，空海帰朝３年後の大同４年（809）４月に嵯峨天皇が23才で即位すると，35才の空海は天性の政界遊泳術と文雅（漢詩文・筆墨）の才を武器にして，まもなく新天皇に近づきを得ている。同年，空海は名跡を所望する嵯峨天皇の宸襟にこたえて，揮毫を献上しているのである（『遍照発揮性霊集』巻４）。その機縁を取り持ったのは，空海の友人の逸勢と思われる。唐への留学期間中に空海の驚嘆すべき知性に圧倒された逸勢は，従兄妹の橘嘉智子皇后経由で，嵯峨天皇に無名の偉材，野の遺賢の発掘を上奏した可能性が高い。世渡り上手の空海の嵯峨朝遊泳術の手始めは，薬子の乱（平城上皇が政権への返り咲きを狙った弘仁元年〔810〕９月の事件）平定まもない頃（10月27日）に，高尾山寺で執り行った鎮護国家の修法

であった。この修法は密教経典の『仁王経』と『守護経』によって行われた。これによって空海は嵯峨朝の厚い信任を得るに到った（東寺誌『東宝記』）。

(3) 嵯峨王朝の新唐風化政策下における空海の密教布教戦略としての書芸

桓武・平城両朝の唐風化政策を積極的に推進した嵯峨天皇の，唐風文化好みを証す資料は多い。なかでも，その代表格として，勅撰の三漢詩文集（『凌雲集』〔弘仁５年成立〕・『文華秀麗集』〔弘仁９年成立〕・『経国集』〔天長４年成立〕）の存在を挙げることができる。真言密教僧の空海にも，漢詩文集の『遍照発揮性霊集』がある。

漢詩文を媒介にして，空海は嵯峨天皇やその側近の文官と昵懇の間柄であった。それを証す史料が，例えば，『経国集』に収録された御詠，嵯峨天皇作「与海公飲茶」であり，『凌雲集』収録の，文官（大舎人頭兼信濃守）仲雄王作「謁海上人」であろう。「海公」とか「海上人」とは，断るまでもなく，空海のことである。

嵯峨王朝下では，渡来の新唐風文化として，喫茶の風習が広まった。最澄も天台山から茶の種を持ち帰って日吉茶園（大津市坂本）を開いたけれども，本邦の喫茶文化の最大の立て役者は，最澄の帰国に便乗して30年ぶりに帰朝した永忠と推定される。その証拠に，帰朝後桓武帝より近江の崇福寺と梵釈寺を預かった永忠は，のちに「近江國滋賀韓埼」みゆきの折に枉駕の嵯峨帝に対して，「大僧都永忠手自煎レ茶奉御」（『日本後紀』弘仁６年〔815〕４月22日の条」）した。嵯峨帝はその折，永忠自らが立てた茶に異国情緒をかき立てられたのか，その後まもなく，「令下二畿内并近江。丹波。播磨等國_殖レ樗。毎年獻上レ之」（『同書』弘仁６年６月13日の条）勅命を発令している。８世紀中葉の中国大陸では陸羽が『茶経』３巻を執筆しているので，最澄に先駆ける入唐僧の永忠が在唐時には，喫茶の風習は唐の僧侶社会にも定着していたものと考えられる。ただし，当時の喫茶は今日の煎茶とは異なり，団茶である。団茶に熱湯を注いで飲む風習は，現代でもモンゴルの遊牧民の間に伝えられている。こうした喫茶の風習は嵯峨朝と盛衰を同じくしている。次の鎌倉時代に栄西が宋王朝より茶の種を持ち帰って喫茶の風習が寺院中心に広く普及し始めるまでは，実は，王朝貴族は白湯を飲む習慣を続けていたのである。

他の新唐風文化としては，書道芸術がある。嵯峨王朝下で書道芸術が開花した背景には，漢詩を贈答する慣習の発生を指摘することができる。

ところが，今日，三筆の一人とその能筆ぶりを嘆賞された嵯峨天皇自身の真跡として確認されているものは，「光定戒牒」１巻（延暦寺蔵）（最澄の高弟光定〔779～858〕に与えられた受戒証明書〔弘仁14年４月14日付〕。嵯峨天皇は信任厚い光定のために，本戒牒に破格の宸筆を染めた）のみである。本書には，初唐の能書家，欧陽詢の峻厳の気に満ちた書法（欧書）の影響と空海の自由闊達で装飾的な書法の影響が指摘されている。実は，嵯峨天皇の能書に欧陽詢や空海の影響が出るのも当然と言える。

それと言うのも，叔父の阿刀大足が伊予親王（桓武天皇の第３皇子）の侍講を勤めたように，卓越した書道や詩文の才を武器に嵯峨天皇に接近した空海も，漢学的教養に富んだ文人肌の，嵯峨天皇の侍講に近い存在だったからである[16]。真済編『遍照発揮性霊集』巻４に依れば，空海は実際に，入京の勅許を下賜した嵯峨天皇に対して，求められるままに劉義慶編『世説』の秀句を能書した屏風両帳を献上したのを皮切りに（大同４年〔809〕10月４日），『劉奇夷詩集』や『貞元英傑六言詩』，『飛白書』を献納し（弘仁２年〔811〕６月27日），引き続いて，欧陽詢や徳宗皇帝，張誼の真跡各１巻に『鳥獣飛白』１巻等を添えて献上しているのである（弘仁２年８月）。欧陽詢の真跡１巻が嵯峨天皇に奉献されているところから判断するに，嵯峨天皇宸翰「光定戒牒」（弘仁14年〔823〕４月）に欧陽詢流の書風が出るのもむべなるかな，という気がする。献上品に空海の添えた言葉は，「良工は先ず其の刀を利くし，能書は必ず好筆を用う」であった。実は，弘法は筆を選んだことが知られる。それを裏書きするかのように，その翌る年，空海は嵯峨天皇に筆生に作成させた

狸毛の筆4管（楷行草書用各1管と写経用1管）を献上しているのである（弘仁3年〔812〕6月7日）。同年7月29日には，『急就章』と『王昌齢集』が献上されている。

ちなみに，それまでに使用されていた羊や兎の毛筆は穂先が柔らかいので，王羲之流の能書に適しているのに対して，穂先の堅い狸の毛筆は顔真卿流の能書に適している。

空海は在唐中に，狂草の「草聖」と称えられた張旭（玄宗皇帝〔685～762〕時代の書家。生没年不詳。草書の筆法を顔真卿や李白に伝法。酒勢を借りた揮毫は有名で，杜甫の飲中八仙歌にも登場）や，張旭以上に狂草の筆を揮った「狂僧」懐素（725？～85？）の，各草書を見る機会があったであろうから，好奇心の旺盛な空海が彼らの狂逸の草書に無関心だったとは考えにくい。空海入唐中の流行は，張旭の筆法を受法した顔真卿の新書体であった。私は本稿の冒頭で既に指摘したように，空海が他人に見せる意図のない「灌頂歴名」を顔真卿の新書体（顔法）を想起させる書体で染筆している点に，空海の個人的好みを見出すのである。

本邦で初めて草書を芸術作品として鑑賞の対象に高めたのが空海であり，空海以前には，名跡は手習いのお手本，即ち臨書であって，味わうべき芸術作品ではなかったのではないか。空海が「狂逸」の「草聖」と称えられた背景には，そうした事情があったように思われる[17]。

空海と並ぶ平安仏教界の大巨人，最澄が物故したのは，弘仁13年（822）であった。桓武朝下，30才で内供奉十禅師（天皇の寺僧）に抜擢された最澄は，旭日昇天の勢いで教線を拡大していった。最澄の前半生は順風満帆であったのに引き換え，その後半生（大同元年～弘仁7年～弘仁13年）は苦難の連続であった。大同元年の桓武天皇の崩御に伴い，強力な外護者を失った最澄は苦難の時代に突入する。天台宗（顕教）の布教活動に全身全霊を傾ける最澄の足元からは，空海のもとに純密の研修に出向させていた愛弟子の泰範が離反（弘仁4年）。泰範の真言宗（密教）への改宗を機縁に，顕劣密優主義者の空海[18]との決別（弘仁7年）。顕密同一主義者の最澄[19]が誠実無比の宗教的真理の使徒であったが故の，空海との宗教的対決と南都六宗の高僧との大宗論（『依憑天台集』）。比叡山に大乗戒壇建立の勅許が下ったのは，最澄の遷化の後であった。

宗教人としての名声を確立して久しい最澄が天台宗の布教活動に余念ない頃に，空海は上記の通り，書道や漢詩文の天分を存分に発揮して，嵯峨天皇相手に派手なパフォーマンスを演じていたのである。嵯峨天皇が譲位する弘仁14年（823）4月までに，空海が芸術家肌の嵯峨天皇に献上した芸術関連の文物は数多い。既述の書や漢詩文以外にも，空海は20代の処女作『三教指帰』（儒仏道三教の優劣を論じた四六駢儷体の比較思想書）で出家宣言を行って以来，夥しい数の密教関連書籍を書き残す傍らで，有り余る文才を駆使して，『文鏡秘府論』（漢詩文評論書）や『文筆眼心抄』（前著の抄録要約）も，余技で執筆しているのである。

以上要するに，空海にとって書芸は，文人肌の嵯峨天皇に狙いを絞った真言密教布教戦略の要であったと考えられる。

註

1）弟子の真済（800～62）は，自らが編集した大師の漢詩文集『遍照発揮性霊集』の中で，大師を草書の達人と敬い，「草聖」という尊称を奉っている。

「天，吾が師に仮して，技術多からしむ。就中に草聖最も狂逸せり。不可得にして再び見ること難し」（『同書』序文）。

また，『続日本後紀』にも，大師を後漢の草書の大家「張芝（張伯英）」に匹敵する「草聖」，と紹介している。

「書法にあっては最も其の妙を得たり。張芝と名を斉しくす。草聖と称せられる」（『同書』巻4，承和2年〔835〕3月25日の条）。

2）空海は弘仁2年（811）8月に，『鳥獣飛白』1巻（現存せず）を嵯峨天皇に献上している。その折に献上された他の作品として，徳宗皇帝や張誼の真跡各1巻，欧陽詢の真跡1首，王羲之の諸舎帖1首，不空三蔵碑1巻，等が記録されている（「奉献雑書迹状」『遍照発揮性霊集』巻4）。

ちなみに，著名な『真言七祖像の讃』（東寺所蔵）を空海の飛白体の実作として伝える最古の文献とし

て，東寺の寺誌『東宝記』が現存するけれども，空海筆を否定する学説もあって，『真言七祖像の讃』真贋論争の決着はついていない。

3）「名前の「真卿」というのもまた神仙世界の高級官僚を意味する道教の神学用語」（福永光司著『道教と古代日本』人文書院，1987年，222頁）。

4）「「灌頂歴名」に見る顔真卿の書法」（『豪華普及版書道芸術』第13巻，中央公論社，昭和57年，182頁）。

内藤湖南に依れば，「灌頂歴名」は「大部分は顔真卿の風，殊に郭家廟碑若くは東方朔画讃などのやうな極めて雄渾の趣を現はしたものの筆意を能く得て居って」（「空海の書法」『旧版書道全集』第11巻），と指摘する。

比田井南谷に依れば，「『灌頂記』はいわばメモ的な性格の書で，削除や加筆がいたるところに見られ，卒意の書として独得のおもしろさを持っている。顔真卿の『争座位稿』と比較され，この『灌頂記』に顔真卿の影響があると考える人もいたが，現在はこの説はあまり支持されていない。しかし，主管が立って紙にくい入るような筆意のある点から見るとこの説もあながち否定することができない」（『書道基本名品集 10 空海・風信帖・灌頂記・他』雄山閣，昭和60年，70頁）。

5）三筆の出典は貝原益軒著『和漢名数』。江戸時代には，寛永の三筆（本阿弥光悦等）や黄檗の三筆（隠元等），幕末の三筆が現れる。

6）『豪華普及版 書道芸術』第13巻，中央公論社，昭和57年，178～9頁，参照。

7）これを逸勢の真跡と推定するのは，江戸初期の能書家藤木敦直（1582～1649）と尾上八郎〔『日本書道史』二〕。それに疑問を呈するのが比田井和子と比田井南谷〔比田井天来『拡大本 三十帖策子（伝橘逸勢書）』天来書院，1995年；比田井南谷編『シリーズ書道基本名品集 10』雄山閣，昭和60年〕。

ちなみに，「伊都内親王願文」には，唐王朝の能書家李邕（678～747）の書法の影響があることが指摘されている（堀江和彦著『三筆三蹟』；比田井南谷編『シリーズ書道基本名品集 10』雄山閣，昭和60年）。

8）弘仁2年（811）染筆。空海説もあり。

9）「此策子，是空海入唐，自所受伝之法文儀軌等也。其文即空海及逸勢書也」（『東宝記』所引『延喜御記』〔醍醐天皇の日記で別名『醍醐天皇御記』〕延喜18年（918）の条）。

第二十九帖の独特の書風こそ，逸勢の筆と指摘したのは，書家の比田井天来（『拡大本 三十帖策子（伝橘逸勢書）』天来書院，1995年）。

ちなみに，空海の自筆と推定される帖は，第二十帖の大方と第二十二・二十六・二十七の全帖。

10）伝逸勢染筆の王城の「北面三門」は現存していないけれども，『古今著聞集』と『橘逸勢伝』に，以下の伝承が見られる。

「大内十二門の額，南面三門は弘法大師，西面三門は大内記小野美材，北面三門は但馬守橘逸勢，をのをの勅をうけ給て垂露の點をくだしけり。東面三門は嵯峨天皇かゝせをはしましける也」（「弘法大師等大内十二門の額を書す事並びに行成美福門の額修飾の事」『古今著聞集』巻7－287）。

「贈従四位下橘朝臣逸勢者，正一位左大臣諸兄曾孫，右中弁従四位下入居男子也。尤妙隷書。弘仁元年四月庚辰，有制，改殿閣及諸門之号，皆額題之。使逸勢書北面門額。承和七年四月丁未為但馬守」（『橘逸勢伝』）。

11）「犯しがたい凛とした品格の高さを，清らかで静かな筆致に包んだ最澄の書の美しさというものは，天台教学の泰斗としての魂の深さをそのままに示すと同時に，わが書道史上，追随するもののない稀有の存在」（『豪華普及版 書道芸術』第13巻，昭和57年，中央公論社，183頁）。

高雅な人柄を写した最澄の清雅な書風を，司馬遼太郎も，次のように絶讃している。

「最澄の書風も，その肖像に相通じている。

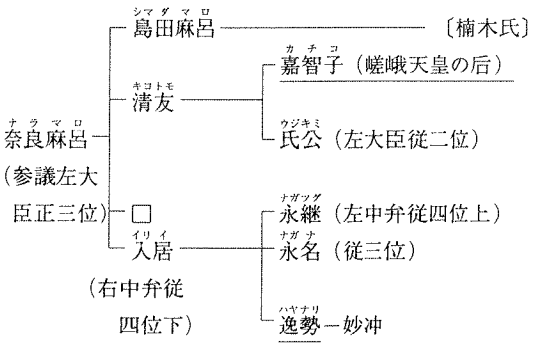
けれんがなく，法は王羲之流を守って端正でありながら，書法などを越えた自然な気韻を感じさせる。最澄が同時代の空海のように書を芸術意識でもって書かなかったのはひとつには長安の流行にうとかったということにもよるが，ひとつには性格にもよるであろう。

最澄の書は，空海を別格として同時代では橘逸勢，嵯峨天皇とならべられる。が，後者にはやや書芸意識がみられるが，最澄にはそれがなく，文章を書く必要上やむなく文字を書くという自然さがうかがわれる。私はそういう意味で明治の正岡子規の書が好きだが，その系列の遠い先蹤に最澄の書があり，しかも子規は遠く最澄の書におよばない。

子規と最澄には似たところが多い。どちらも物事の創始者でありながら政治性をもたなかったこと，自分の人生の主題について電流に打たれつづけるような生き方でみじかく生き，しかもその果実を得ることなく死に，世俗的には門流のひとびとが栄えたこと，などである。書のにおいが似るというのは，偶然ではないかもしれない」（『街道をゆく16・叡山の諸道』〔朝日文庫〕，1994年，38頁）。

12）橘氏略系図（『橘逸勢〔日本書学大系・法書篇 第九巻〕』同朋舎，1987年，56頁より）（下線は引用者）

敏達（ビダツ）天皇－□－□－□－美努王（ミノオウ）－諸兄（モロエ）



13）『延暦寺護国縁起』大同4年2月3日の条。

ちなみに，最澄と空海との間に交わされた往復書簡集は，『伝教大師消息』，『遍照発揮性霊集』，『高野雑筆集』，『拾遺雑集』，『風信帖』等に収録。

14）最澄の筆授の態度に対する空海の苛立ちの頂点を歴然と読み取れる書状として，弘仁4年（813）11月23日，空海が最澄に対して『理趣釈経』の借覧要請を峻拒した「比叡山の澄法師の理趣釈経を求むるを答する書」（『遍照発揮性霊集』巻10）が現存する。

15）我こそ正統の受法者なり，と空海が胸を張った正純密教（純密）とは，7世紀に成立した根本経典の『大日経』と『金剛頂経』に依拠する密教のことで，7世紀以前に遡及する雑部密教（雑密）とは区別される。最澄が持ち帰ったのも純密であった（金剛智→不空→順暁→最澄と付法された金剛頂系密教と，善無畏→義林→順暁→最澄と付法された大日経系密経）が，体系性を欠いた断片的な内容であった。のちに『空海請来目録』を閲した最澄は，そのことに気付いて，密教に関しては，謙虚に空海の門をくぐったのである。

16）漢学的教養に富んだ芸術家肌の嵯峨天皇と空海との昵懇ぶりは，次のエピソードにも伝えられている。

「嵯峨天皇と弘法大師と，つねに御手跡をあらそはせ給けり。或時御手本をあまた取出させ給て，大師に見せまいらせられけり。其中に殊勝の一卷ありけるを，天皇仰ごとありけるは，「これは唐人の手跡也。其名をしらず。いかにもかくはまなびがたし。めでたき重寶なり」と，頻に御秘蔵ありけるを，大師よくよくいはせまいらせて後，「是は空海がつかうまつりて候物を」と奏せさせ給たりければ，天皇更に御信用なし。大に御不審ありて，「いかでかさる事あらん。當時書ゝるゝ様に，はなはだ異するなり。はしたてゝもをよぶべからず」と勅定ありければ，大師，「御不審まことにその謂候。軸をはなちて，あはせ目を叡覧候べし」と申させ給ければ，則はなちて御らんずるに，そのとし其日青龍寺にをいて書ㄨㄟ之ㄋ，沙門空海，と記せられたり。天皇，此時御信仰ありて，「誠に我にはまさられたりけり。それにとりて，いかにかく當時のいきをひにはふつとかはりたるぞ」と尋仰られければ，「其事は國によりて書かへて候事也。唐土は大國なれば，所に相應していきをひかくのごとし。日本は小國なれば，それにしたがひて當時のやうをつかうまつり候也」と申させ給ければ，天皇おほきに恥させ給て，そのゝちは御手跡あらそひなかりけり」（「嵯峨天皇 弘法大師と手跡を爭ひ給ふ事」『古今著聞集』巻第7－286）。

17）本段落の先行する指摘として，藤田経世「空海の書」『空海』吉川弘文館，昭和58年，423～5頁，参照。

18）顕劣密優主義者空海の本領が遺憾なく発揮された思想的著作は数多い。顕教に対する密教の優位性を説いた空海の代表的著作として，『弁顕密二教論』や『即身成仏義』・『声字実相義』・『吽字義』の三部作を初め，『秘密曼陀羅十住心論』，『秘蔵宝鑰』が伝存している。

19）顕教（法華一乗たる天台宗）と密教（真言一乗）の一致を説く最澄の書状として，弘仁3年8月19日付空海宛書状，弘仁7年5月1日付泰範宛書状等，参照。